ついたち☆ガ～ル

広瀬もりの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ついたち☆ガ～ル

【Ｎコード】
Ｎ０１３１Ｕ

【作者名】
広瀬もりの

【あらすじ】
片思い歴１２年と４ヶ月、毎月一日にお隣の勲くんに告白し続ける千花。振られ回数１４７回、そして迎えた１４８回目当日だけど今回はやる気ナッシング。その理由とは……？◇サイト「夏色図鑑」で掲載中の作品です。一話読みきりの連作です。

その1＊千花

カレンダーを一枚めくれば、そこはパラダイス。私の頭の中は一面がお花畑になる。

そんな日々を続けて、早十二年が過ぎた。これはもう、誰かに表彰状でももらわないと済まされないくらいのすごい執着心だと思う。

……でも、今日は駄目。目の前、真っ暗闇になってる。高校からの帰り道、足取りも重い。

「おい、どうした？」

電信柱と同じポーズでそこに立っていた人を無視して通り過ぎようとしたら、三十メートルくらい過ぎたところで呼び止められた。

黙ったまま、のろのろと振り返る。今日の私は日本海溝よりも深く沈んでいるから、ちゃきちゃきした反応は無理。そしたら、電信柱の上にくっついている顔が、意地悪くにやりと笑った。

「とうとう日付の感覚がなくなったか、天然ボケもそこまで進むと大変だな」

これで私よりも三歳年上、しかも現役合格で今年の春から大学生だって言うから呆れちゃうよね？　花の十六歳が人生の終わりのような顔をして歩いているというのに、やさしい言葉のひとつもかけられないなんて最悪。

「ごめん、これで記録はストップすると思う」

それだけ言って、目の前の門を開ける。同じようなデザインの建物がいくつもいくつも並んでいるここはよくある新興住宅地。私はそのまま自分の家に入ろうとした。

「待てよ」

先ほどの意地悪男は、まだ同じ場所に立っている。そう、たぶん彼は私のことを待っていたわけじゃないんだよね。ちょうど出かける支度をして家を出てきたところで、向こうの角を曲がってやって来る私に気づいたんだ。いいよなー、お気楽な大学生はこんな夕方

からご出勤か。
「今日の俺のシフトは深夜までだぞ。やっぱり気が変わったって泣いたって、間に合わないからな」
最近始めたスポーツジムのバイト。空き時間に施設が使いたい放題ですごくおいしいって自慢してた。そのせいか、以前にも増してムキムキになってきて、いったい何を目指してるの？　って感じになってる。
ちっちゃい頃は本物の電信柱みたいにひょろりとしていたのに、人間って鍛え方次第で変わるものなんだなあ。
「いいもん、今だって泣きたい気分だから」
本当に涙がこぼれそうになったから、慌てて家の中に飛び込もうとした。それなのに、意地悪男がわざわざやってきて、私の動きを阻止する。正確には、後ろから片腕を掴まれた。
「何かあったのか？」
だからさ、もうちょっとやさしく、声をかけられないのかな。新しい彼女ができてもすぐに振られちゃうの、絶対にこの性格に原因があるんだと思う。
「別に。勲（いさお）くんに話すようなことは何もない」
いいじゃん、もう。放っておいてよ。
「何もないなら、どうして１４９回目を放棄するんだ」
私はすごーく嫌そうな顔で振り向いた。
「……１４８回目、なんだけど。勝手にひとつ増やさないで」

三歳の春、ここに引っ越してきた私はお隣に住む勲くんに一目惚れをした。理由なんて覚えてない、ただひとつ言えることは自分がずいぶんませたコドモだったってことだな。
「あたし、いーくんがすき！　およめさんにしてください！」
思い立ったらすぐ実行、策を練るとかそういうのがまったくできないところは十二年前も今も同じ。そしたら、彼は即答した。
「お前、頭、大丈夫？」

その日が四月一日、そう世間ではエープリルフールと呼ばれるその日だったことも災いした。必死の告白は呆気なくスルーされ、何ごともなかったかのように毎日が過ぎていく。そりゃあね、落ち込んだよ、三歳児なりにね。

そして、一枚カレンダーがめくられたときにハッとした。また「1」という日がある。嬉しくて次の一枚もめくってみた、もちろんまた「1」という日がある。毎月、毎月、新しくやってくるその日に同じくらい新しい気持ちを伝えよう。たくさん頑張れば、いつかきっと彼も「うん」と言ってくれる。そう信じて。

お隣の「いーくん」は私のお兄ちゃんと同級生。だからふたりはいつも一緒に遊ぶ、小学校だって一緒に通う。私はふたりのあとをどこまでもどこまでもくっついていった。校門の前で、お前はあっちの幼稚園に行けと言われて、わんわん泣いたっけ。

あれから、十二年と四ヶ月。未だに私には「春」が訪れない。だけど、負けるもんか。今となっては、月初めの定例行事のようなものになってしまった「告白」だけど、毎回手を変え品を変え頑張ってきた。当たって砕けて、再生してまた翌月。それが……記念すべき?１５０回目を目前として、心がぽきっと折れるようなとんでもない事件が起こるなんて。

「何だ、これは」

このまま下手に言い逃れをすることもできないだろうなと諦めて、私が差しだした一枚の紙切れ。それを不思議そうに眺めている彼。

「見ればわかるでしょ、四月に高校でやった健康診断の結果」

「へー、１５４．４ｃｍ？　相変わらずのチビだな、お前」

やっぱりそこを見たか。この電信柱男は身長だけが自慢なんだものな。いつも三十センチも高い場所から私のつむじを見下ろして、すごく偉そう。

「そこは見なくていいから！　……もうちょっと、下の方を見てよ」

体重とか座高とか、恥ずかしい数値が並ぶけど、まあいいとして。

ここまで来たら腹をくくる他ないものね、落ち込みの原因を一番わかりやすい方法で教えてあげよう。
「肥満度っていうの、１１．３％になってるでしょ？」
隣に書いてある「肥満度の見方」っていう項目によると、１０～２０％未満は「肥満傾向」となっている。ようするに「ちょっと太り気味」ってことでしょう？
「でもなあ、こんなの身長と体重から計算しただけだろ？　お前は部活やってるんだし、筋肉の重さもあると思うぞ」
これって、一応は慰めてくれてるのかな。けどなあ、残念ながら私の心は浮上できるはずもない。
「実は……今、そこにある体重より、三キロも増えちゃったんだ」
はあ？　って口をあんぐり開けた彼が、夏服の制服から出た私の腕や脚をじろじろ見てる。
「ま、まあ……多少は肉が付いたって感じか？」
やっぱり、わかるか。だよねーっ、三キロだもん。
「だから、元通りの体重になるまで、勲くんには会わないことにしたの。ちゃんと話したんだから、もういいでしょ！？」
本当に、乙女の気持ちがわからない人なんだよな。私にだって、プライドってものがあるんだからね。彼に言い寄ってくる女子たちって、みんな例外なくとってもスリム。そのくせ、出るべきところはきちんと出てるというオソロシサだ。
あーゆー人たちとなら付き合ってもいいって思ってるんだよね？　はっきり言って、私は全然好みじゃないってことだよね？　……わかってるんだけど、そうだけど、それでも諦めきれないから１４７回も頑張ってきたんだ。
「千花（ちか）」
そこで今日初めて、彼は私の名前を呼んだ。
「千回目で花を咲かせるって言ってたのは、お前だろうが」
何だか、いきなり古い話を引っ張り出してきたよ、この人。
「……でも、それだと八十三年掛かるって教えてくれたの、勲くん

だよ？」

いつまでもいつまでも首を縦に振ってくれない彼にしびれを切らして、とうとうこんなことを言い出したのは三年目の春。ちょうど私が勲くんと同じ小学校に通い始めたその年だった。

「もうひとつ、忠告してもいいか？」

どうでもいいけど、早く出かけないとバイトに遅刻するよ？　あまりにぐずぐずしてると、こっちの方が心配になっちゃう。

「本気で痩せる気なら、毎日学校帰りにばかでかいパフェを食うのは止めろ。あれだけ食ってて、太らない奴いたらその方が不思議だ」

……え、何なのそれって……。

「あそこのファミレス、俺のバイト先と真向かい。毎日馬鹿面で何をしゃべってるのかと思ってたぞ」

……そのーっ……

「勲くん、それって軽くストーカーしてません？」

言っちゃ駄目だと思ったんだけどさ、ついつい。でもひどーい、見られてたなんて全然気づかなかった。

「見たくもないものを視界に入れてしまう俺の立場になってみろ」

……あ、ちょっと怒ったな。わかりやすいんだからな、この人って。

「それにな、三キロくらい増えても減っても、そうたいした変わりはないって。――　ほら、見ろ」

七月一日、梅雨の晴れ間の夕焼け空が私たちの上に広がっている。次の瞬間、その朱色が少しだけ近くなった気がした。

「えっ、えええっ……！」

いきなり抱き上げられてますけどっ、しかもお姫様抱っこって奴ですけどっ！？　ど、どうなってるの。これって、絶対に変――！！！

「まだ、これくらいちょろいもんだ。安心しろ」

それから、夕焼けのせいか少し赤くなった頬で付け足す。

「今回は出血大サービスだからな、……これで何か言いたくなった

だろう？」

えーっ、……ちょっと待って！？　ど、どうしよう。すごく嬉しいかもっ、でもそれよりも恥ずかしさの方がもっと上かも……！

だってだって、いつもは遠いはずの彼の顔がこんなに近い。ほとんど目立たない毛穴とかお髭のそり残しとか、そういうのまで全部チェックできちゃうよ。

「えっ、ええとっ、……ええとね」

困った、考えが全然まとまらないっ。頭の中がごちゃごちゃ、いろんな言葉が渦巻いて収拾が付かなくなってる。

「三キロ痩せたら、ご褒美にチュウしてくれる！？」

もちろん彼はすごい驚いた顔になって、もうちょっとで私を落としそうになった。どうやらもちこたえてはくれたけど、そろそろ限界かな。

「馬鹿、いきなりそんなこと言うな」

ものすごい怖い顔になったから、一瞬鼻先に噛みつかれるのかと思っちゃった。でも次の瞬間、頬に一瞬だけ触れた彼の唇。

「そういうことは、大人になってから言え。俺はガキ相手はごめんだからな」

夕焼け色の頬を眺めていたら、すごく嬉しくなってきた。だから、ちょっとだけ笑っちゃったの。内緒だけどね。

その2＊勲

久々の早起きは辛い。だが、今日は一コマ目から必修科目だから、とりあえず時間までに席に着いていなければ。

長年慣れ親しんだ住宅街の風景。眠い目をこすりつつ、駅に向かっていた。

――と。

そこで、俺の耳はぴくっと動く。普通の奴なら大通りの車の往来に紛れて聞き逃してしまうであろう物音も、取りこぼすはずもない。そう思っているうちに、どかどかと地鳴りのような足音が近づいてきた。

やれやれ、そんなに慌てることもないのに。

俺は知らずに笑みのこぼれそうになる口元を必死で引き締める。お世辞にも「軽やかに」とはいえないこの足音の主は、わざわざ振り向かずとも丸わかり。立ち止まって振り向いてやってもいいのだが、そうするまでもなくすぐに追いつくだろう。そう思って、脇道にそれた。

夏草の揺れる川沿いの道。この遊歩道が、駅までの近道になる。背後の足音も、少し遅れて角を曲がってやってきた。

「おはようっ、勲(いさお)くん！」

まったく、何て嬉しそうな声なんだ。おめでたいにもほどがあるぞ。

今はじめて気がついたようにさりげなく振り向くと、そこには全速力で駆け寄ってくる女子高生の姿があった。

梅雨明けを迎えた七月中旬、朝から雲ひとつない青空で少し身体を動かすだけで身体中から汗が噴き出してきそうである。そんな中で無駄な動きをしているのだから、もう見られたもんじゃない。

ブルーを基調とした涼しげな制服はすっかり着崩れて、ついでに髪もあちこち飛んでいる。しかも額からは汗がだらだら流れていた。

コイツの名前は田所千花（たどころ・ちか）。名前こそは可愛らしいがその行動力といったら、まさにイノシシ並みだ。俺が小学校に入学した春に隣に引っ越してきてからの付き合いで、かれこれ十二年。見た目は多少成長したものの、残念ながら中身の方はあまり変化していない様子だ。

「……朝から、騒々しい奴だな」

同じテンションで対応してやる義理はない。というか、そんなことをしていたらこちらの身が保たない。そう思って冷ややかな眼差しで見つめてみても、当の本人はまったく気にする様子もなかった。

「うん、元気元気！　今日もいい天気だねえ～！」

あれ？

こっちが立ち止まってやったというのに、彼女は俺の脇をするりとすり抜けさらに前へ前へと走っていく。

「おっ、おい！　何やってんだ、まだ急ぐ時間じゃないだろうが」

この馬鹿、また時計を見間違えたか。コイツのドジぶりは半端じゃなくて、時計の文字盤を平気で一時間二時間読み違えることもザラにある。過去にそんなことが何度もあったから、こっちも慣れたものだ。

そうは思いつつも、気づけば俺も小走り状態になっている。つられる必要はないとわかっているが、何となく面白くない気分になっていた。俺を目指して走ってきたのかと思っていたのに、これはいったいどうしたことか？

「わかってるよー、それくらい。違うのっ、これは筋トレだから～！」

どう考えても筋肉を鍛えているとは思えない。だいたい、こっちの小走りとコイツの全速力が同じレベルだというのはどういうことか。

「何言ってるんだ、朝っぱらで身体が十分に目覚めていない状態で走り込んだら身体に負担が掛かりすぎだぞ。最悪、そのまま身長の伸びがストップすることも十分あり得る」

バイトで得た知識をひけらかしたわけだが、最後の方は俺の勝手なでっち上げだ。でもその効果は抜群、彼女は今まで必死に動かしていた足をぴたっと止めた。

「……えっ、そうなの！？」

「しかもお前のことだ、準備体操も何もせずにいきなり走り出しただろう。そういう心臓に負担を掛けるやり方が一番ヤバイんだぞ」

ふふ、本気で青ざめているぞ。まったく、単純な奴だ。

「しっ、心臓に負担って……そんなに大変なことなの？」

まだ肩で息をしている。無理もない、きっと家を出てからの数百メートルをずっと走り続けていたのだろうから。俺がここで止めなければ、さらに倍以上はある駅までの道のりを完走していたに違いない。

「そんなの、当然だろ。ちょっとはココを使え、ココを」

俺が自分の頭を人差し指で突いてそう言うと、彼女は口をもごもごと動かしながら俯いてしまった。

「だってー、汗をかくとちょっとは体重落ちるし！　だから、毎朝走り込んだら、どんどん痩せていくかと思ってたのにーっ！」

それは、ただ身体の水分が外に出ただけだろ？　水を飲めばプラマイゼロだし、ジュースを飲めばかえってプラスになってしまう。それくらい、ダイエットの基本じゃないか。そういう情報は取り逃さない女子だったら、当然わかっていてもいいはずの知識なのに。

「……もしかして、この前のことをまだ気にしているのか」

肥満率なんたら、という話をコイツがしていたのは数日前のことだ。一晩寝ればすべてがリセットされるほど単純な奴だから、その後すっかり立ち直っているだろうと思っていたが甘かったか。

「うーっ、そりゃ気にするよー。この頃、制服もきつくなってきたし！」

コイツのやることなすこと企んでいることは、俺にすべて筒抜けだ。こうして面と向かっていればほとんどの情報は読み取れるし、さらにコイツの兄貴が俺の親友だったりするから最強である。

「それはお前が無理して、春の採寸のときにワンサイズ小さめのを選んだのが間違いだったんだ。店の人にずいぶん渋られたって聞いたぞ」

これも兄貴情報のひとつ、下手をしたらコイツが家でくしゃみをした回数まで知らされてしまうような勢いだ。

千花の兄貴。そいつの名は諒介というのだが、ガキの頃からの付き合いだけあってツーカーの仲だ。大学進学で進路は別々になったものの、今でも頻繁にメールのやりとりをしている。その内容のほとんどが、今目の前にいる「うっかり娘」関連のことだというのがなんとも、だが。

「で、でもーっ……」

さっきまで全速力で突進していたと思ったら、今度は苛つくほどのカメの歩みに変わっている。いつまでこんな風にノロノロ歩いていたら、マジで電車に乗り遅れるぞ。付き合ってやる義理もないと思いながらもついつい足並みを揃えてしまう自分が情けない。

「勲くんだって、やっぱ、ほっそーい子が好きでしょ？　私、知ってるもん」

――は？　何だ、それは。

いきなり思いもよらないことを断言されて、さすがに慌てる。まあここで、相手に悟られるようなボカはやらないが、かなりのダメージだったことには変わりない。

「どういうことだよ」

俺は知らないぞ、そんなこと。そう思っていたから、少し険しい目つきになっていたかも知れない。だが、彼女は全然負けてないよと言わんばかりに睨み返してくる。

「一昨日、合コン行ったでしょ？　そのときのこと、お兄ちゃんに教えてもらった」

さらにバッグの中から携帯を取りだして、すぱぱぱっと操作している。

「写メだってもらったんだから」

もともとがビー玉みたいに大きな目、それが今は涙で潤んでいる。ついさっきまでニコニコしていて、そのあと怖い顔になったと思ったら、次はコレだ。あまりにも変化がありすぎて、ついて行けない。

そして、ずいっとこちらに突きつけられたケータイ画面。そこにはアイメークがっつりのケバイ女と俺のツーショットが写っていた。もちろん俺の方は嫌々な顔である。

「すごく盛り上がってたんだって？　もしかして、もう付き合っちゃったりしてる？」

身長差が三十センチ近くある俺たちは、視線の先に見える風景もまったく違っていると思う。彼女が俺を見つめるときは、決まって少し背伸びになる。俺の方は逆にかなり猫背になる必要があった。

「……だったら、どうするんだよ」

あれは諒介に無理矢理連れて行かれた店でのことだった。仲間内の飲み会だと聞かされていたのに、案内されたテーブルには見慣れない女たちが並んでいる。正直、すぐにでも回れ右をして帰りたい気分だったが、そんなことをして場を盛り下げるのも大人げないと思い、どうやら一次会が終わるまでは付き合った。そのとき、隣に座っていたのが今回の疑惑の女である。

だいたい、あんな女、全然好みじゃない。やたらとしつこく言い寄ってきたが、最後は上手く巻いたつもりだ。でもそのことを今は正直に話してやる気にはなれなかった。

「うー、ライバル登場って奴だね。今回の人はかなり手強そうだなー！」

いつも思うんだが。どうしてコイツは自分の兄貴が伝える情報をすべて鵜呑みにするんだろう。お陰で俺は、とんでもない女ったらしだと誤解されてしまっている気がする。

小学校に上がった年にコイツにロックオンされてしまった俺は、女に追いかけ回されることに関してはかなり年季が入っていると言えよう。追い払っても追い払っても、子犬のような目をしてあとをついてくる。正直、女なんてコイツひとりで十分だ。他に手を出そ

うとは到底思えない。
　諒介が面白がってあることないことコイツに吹き込むから、あらぬ誤解を招いてしまう。まったく、困った奴だ。千花の兄貴じゃなかったら、とうの昔に縁を切っているのに。
　――　だけど、当の本人はそのことにまったく気づいてはいないわけで……。
「だからねっ、私決めたんだ！　次の八月一日までに十キロ痩せてこの人よりもずっと綺麗になるの！　今度こそ絶対の絶対だから、ちゃんと見ててね。私の見違えた姿を見て、勲くんを必ずよろめかせてあげるから……！」
　おいおい、何だよそれは。しかも「よろめかせる」って、かなりレトロな言い方だぞ。その響きに、限りなく昭和の香りがすると思うのは俺だけか。
「――　三キロ以上痩せたら、何もしてやらないぞ」
　ぽつんと、呟いた声。別に彼女に聞かせるつもりもなかった。俺としては、今のままでも十分だと思っている。確かに春先と比べたら少しばかり丸さが増した気もするが、それも許容範囲内。ガリガリに痩せて骸骨みたいになったコイツなんて、想像するだけでおぞましい。
「……え？」
　不思議そうな顔をして俺を見上げたその瞳には、真っ青な青空が映っていた。その眼差しにやられそうになるとは、そろそろヤバイかも知れない。
「ほら、早く行かないと間に合わなくなるぞ」
　俺はわざと視線をそらすと、そのまま先に歩き出した。あとから小走りに付いてくる、その足取りを耳元に感じながら。
　タイムリミットまで、あと二年半と少し。そこまで俺の理性が保つことを、今は神に祈りたい。

その3＊諒介

俺には、十数年来の友達がいる。

そいつの名前は、黒須勲（くろす・いさお）という。出会いのきっかけは、そいつが俺の家の隣に引っ越してきたから。偶然なことに同学年であったため、なんとなく一緒に行動することが多く、気づいたらいつでも一番近くにいた。

家が隣同士であれば、小中学校は公立ならば同じで当然。さらに高校も同じ県立に進み、この春からは同じ自宅から通える私立大学に進学した。今では学部こそは違うが、それでも一般教養の履修の多い一年次であるから、大学構内でも頻繁に顔を合わせている。

奴は、俺より少しだけ顔が良くて、少しだけ身長が高い。加えて、少しだけ頭が良く、少しだけ運動神経に優れている。そして――ほんの少しだけ、俺より女にモテる。

ここまで言えば、わかるだろう。ようするに、黒須勲という男は俺にとって、かなり鼻につく相手なのだ。

しかも、さらに胸くそ悪いのが、当の本人がそのことをまったくわかっていないという点である。テストでクラス最高得点を取っても「それがどうした」という顔であっさりしてるし、バレンタインチョコが机からはみ出そうになっているのを見てもなんとも感じてないようだ。そしてそんな性格であるくせに、なぜかどこへ行っても友達が多く、やたらと持ち上げられる。

だから、俺はかねがね思っていた。

コイツを一度でいいから、腰が抜けて動けなくなるほど驚かせてやりたいと。さもなくば、絶望に打ちひしがれて見る影もないほどうなだれさせてやりたいと。

しかし、それが何故か上手くいかない。

どういうわけか、勲にはコレ、という弱点が見つからないのだ。たとえば、椎茸を見ただけで全身に蕁麻疹ができるとか、実はかな

づちで全然泳げないとか、そういう人間なら誰でもひとつやふたつは持ち合わせているであろう「何か」が見あたらない。

これは、ゆゆしき問題である。だから俺はここまで、あれこれと思案に思案を重ね、策を練り続けていた。

もちろん、奴と俺とは表面上はとても仲の良い、親友と呼べるレベルの関係である。奴本人はもちろん、周囲の誰もがそう思って疑わないだろう。実は一部の輩からは「友情を超えたアヤシイ仲にあるのでは!?」という疑惑まで生まれているらしいが、そんな気色悪いことだけはできれば考えないでほしい。

そんなわけで、今、勲が俺の前を歩いている。

俺と同じで、二コマ目からの講義に出るつもりでいるのだろう。時間的にはまだまだ余裕があるから、その歩みものんびりしたものだ。……あ、今あくびをしたな。昨日もバイトで遅かったのだろうか。

奴は今、駅前のスポーツジムでバイトをしている。あそこの施設はお世辞にもオシャレな雰囲気じゃないし、どちらかというと「中高年御用達」。どうせなら若い女がたくさん集まる店を仕事先に選べばいいのに、よくわからない奴だ。聞くところによると、バイト料が飛び抜けていいって訳でもないらしいし。

なにしろ、あいつは俺よりも「少しだけ」顔がいいのだ。ということは、世間一般で言えば十分「イケメン」と呼ばれるレベルになる。日頃から鍛えているだけあって、ガタイもいい。

と言うことは——ちょっと頑張れば、イイカンジな女子をいとも簡単に落とせるってことになる。

そしてこれもやはり世間一般の常識であるが、イイカンジな女子は同じくイイカンジな友人とつるんでいるものだ。ようするに、勲がイイカンジの女をモノにすれば、もれなく俺もイイカンジの女の友人とお近づきになれる。なんという効率の良さ、やはり友情は大切だ。

だが、しかし。

悲しいかな、勲にはイイカンジの女子をゲットしたいという野望がまったくない。表面上はスカしていても内心実は……という訳でもないらしい。実際、奴狙いであのスポーツジムの会員になる若い女もちらほらいる。そして彼女たちから直接聞いた愚痴をまとめて考察すると、勲が半端なく鈍感で融通の利かない馬鹿な男だということがしみじみわかる。

……というか。

どうして俺が、奴狙いの女たちの愚痴聞き係になる必要があるんだ。本当にお人好しにも程がある。自分自身が悲しくなって、枕を濡らす夜だってあった。

だが、俺のそんな悲しみも苦労も、あいつは全然わかってない。あんな友達甲斐のない奴なんて早々に切り捨ててしまえばいいのに、どうしてもそれができないとは。俺はどこまで善良な人間なんだ。

「オッス、勲！　元気してるか～？」

それでも俺は、どこまでも爽やかに朝の挨拶をする。小学校の頃は玄関先まで迎えに行って一緒に登校したものだが、中学からは別々の部活に入ったためそういう習慣も消えた。だから今ではこうして偶然一緒になればそのまま連れだってしゃべりながら歩くし、半月くらい言葉も交わさずに過ごす時期もある。

まあ、それでもいいのだ。俺たちが積み重ねてきた歴史はそう簡単に変わることはない、これからもこんな風に年を重ねていくことになるのだろう。

「おう、諒介」

奴は俺の存在に初めて気づいたようで、覇気のない挨拶を返してきた。やっぱり眠いらしい、こんなで真面目に講義が受けられるのか、他人ごとながら心配になる。

「なんだよ、お前。それじゃまるで、仕事に疲れた中年サラリーマンの朝みたいだぞ。俺たちはようやく灰色の受験地獄から解放されて、今や人生の春を満喫している最中じゃないか。しゃっきりしろ

よ、しゃっきり！」

景気づけに、背中をバーンと叩いてやったが、そこにいくらかの憎しみを込めていたことは秘密だ。

しかし、勲は俺の心優しい言葉に、しらっとした眼差しを向ける。

「別に……去年が灰色だったとも思わねえし、今年が人生の春とも思えねえけど」

ほらほらほら、出たぞー。この、「のれんに腕押し」な反応。本当にコイツは省エネ家電だ、無駄な電力を極力消費せずに生きている。

「何だよー、心にもないことを言いやがって！」

わざと明るく返してやったが、それに対しての反応もどうしようもなく鈍い。

……けっ、本当に付き合いづらい奴だ。だが、ここで腹を立てる暇はない。今日の俺には、コイツを奮い立たせなくてはならない使命があるのだ。

「ところでーっ。お前、今日はバイトないよな？　夜は暇か？」

ふふふ、あのスポーツジムは水曜が定休日だ。それくらいはわかっている、俺はリサーチには抜け目のない男なのである。

「……あ、俺、パス。わりいけど、他を当たって」

おいおい、待て。何だ、それは。

俺はまだ、何も言ってないぞ。どうして、そんな風に返してくるんだ。

「また、合コンの人数合わせ、とかだろ？　お前も暇だなあ、よくそんなのにばっか出られるな」

何だよ、その言い方。それじゃ、こっちが馬鹿みたいじゃないか。

しかも半分くらいしか当たってないし！　実は今日の飲み会は「勲くんを絶対に連れてきてね！」と懇願する女たちにせがまれてセッティングしたものだ。だから、なんとしてでもコイツには出て

もらわねばならない。何しろ「本日の主役」なんだから。
「ふうん、そんな言い方するんだ。……じゃ、仕方ないな。今回は諦めるよ」
珍しくあっさりと引き下がると、勲は「おや？」という顔になる。この辺も最初から計算済み、なんて抜け目のない俺だ。
思わず、にやっと笑いそうになったが、あわててかみ殺した。そして、努めて何気なさを装って話題を変える。
「ところで～。お前、ウチの千花とはその後、ど～なってんだ？あいつ、言ってたぞ。また振られた～って」
ええと、ここでちょっと解説。
いきなり出てきた「千花」というのは、お察しの通り女性名。正確には、俺の三歳下の妹の名だ。
そして、この妹がどうしようもない馬鹿。とにかく絶望的すぎる馬鹿、全人類が号泣するくらいの馬鹿な奴なのだ。
何しろ、妹は三歳の春からずっと、ここにいる黒須勲に毎月の初日に告白し続け、そして振られ続けること１４８回。それでも懲りずに来月１４９回目に果敢に挑もうとしている。
そりゃ、勲は俺よりも少しだけいい男だ。だが、いくらなんでもこれはひどい。相手に脈がないと思ったらすぐに諦めるということも、長い人生を生き抜くためには大切な処世術だ。だが、妹は馬鹿だから、未だにそれに気づかない。
「……ああ、千花？　そういや、このところ会ってないな」
それがどうしたと言わんばかりのコメント。おお、妹よ。お前は本当に哀れな奴だ。兄ちゃんまで悲しくなってしまうよ。
「ふうん、そうか」
俺はなおもこみ上げそうになる笑いを必死に抑えながら続ける。
「そういや、あいつは最近『勝負下着』とやらを購入したらしいぞ。何でも、いつそんな事態になってもいいように気をつけるようにしたらしい」
その瞬間、勲がぴくっと反応した。奴は上手くごまかしたつも

りらしいが、こっちには丸わかりだ。
「だけどなあ、あいつの制服、スカート短いし。あれ、絶対に駅の階段で下から見えてるよな……」
勲は俺から視線をそらす。でも動揺しているのは明らか、さあもう一息だ。
「だがなあ、さすがにコレはないだろう。いくら疲れてるからって、リビングのソファーだぞ。あまりの醜態に思わず写メってしまった」
そして、取り出す携帯。すぐに画像フォルダを開くが、わざと奴からは見えないポジションを取る。
「これ笑えるから、今夜のネタにしてやろうかと思ってるんだ。見ろよ、モロ見えだぞ～！」
あはは、笑えるし。こんな短時間の間に、冷や汗までかいてるぞ。
「おっ、おい！　ちょっと待てっ、諒介っ。お前、それは犯罪じゃないか……！」
そして、ものすごい勢いで俺から携帯を取り上げようとする勲。身を翻して逃げる振りをしながら、実は絶妙なタイミングで携帯を手渡した。

しばしの、沈黙。

顔面蒼白になった奴は、その呆然とした眼差しを静かに俺に向けた。
「これが……勝負下着？」
チェックするのはそこかい！？　……とは思ったものの、予想通りの反応にほくそ笑む俺。
「らしいな、あいつの美的センスはよくわからん。まあ、千花としてはそれで男を悩殺できると信じているんだろうな」
ばーんと大股開きでソファーに横たわっている妹。その絶望的なほどに色気のない姿にはコメントのつけようがない。しかもっ、

丸見えになっている「イチゴぱんつ」……。

その後もしばらく、勲は何も言わずに歩き続けていた。いったい何を考えているんだろう、でもそろそろその携帯は返してほしい。

「おい、勲――」

そこまで言いかけたら、奴はぽんと俺の手に待ち受け画面に戻した携帯を渡してきた。そして、先を歩きながら言う。

「……今夜、何時集合？」

見上げれば七月の空。真っ青なそのスクリーンに、いつの間にか一筋の飛行機雲が描かれていた。

その3＊諒介（後書き）

……で、このあと問題の合コン写メが撮られるという訳です。遊ばれてますね、勲くん（笑

その４＊千花

やってきました、夏休み。

今年は例年以上に、ここまでの道のりが長かった気がする。

なにしろ、七月になった途端に梅雨明け。そして、その後は毎日がうだるような暑さ。私の通う公立高校でも連日複数の教室で体調不良な生徒が出て、保健室は満員御礼。ひどいときにはクーラーが入っているという理由で図書室までが臨時の救護室に使われていたらしい。

幸か不幸か、私は一度もそこに担ぎ込まれることはなかったが、それでもアイスの食べ過ぎで派手におなかを壊した。おかげで二キロも体重が落ちたのだから、結果オーライってところかな。

「やったーっ、なっつやすみだ～！」

駅前商店街の真ん中で、ついつい大声で叫んでしまった。

そんな私の隣を、プールバッグを手にした小学生が不思議そうな顔をして通り過ぎていく。

……なんなの、その冷めたリアクションは。

睨み付けた背中はあっという間に遠ざかり、変わって目の前からは塾の道具をいっぱいに詰め込んだ鞄を抱えた小学生がやってくる。そして、その周りには平日の昼間らしく日傘を差したお婆ちゃまやステッキ片手のお爺ちゃまがうろうろ。

そんな中で異様なほどに浮いているのが、ピチピチギャル（死語）な女子コーセーの私だ。

ま、仕方ないんだよね。今の時間、中学生はそのほとんどが部活に励んでるし。高校生だって半分くらいは部活だろうな、さもなくばバイト？

そーなんだよね、ぼんやりしていたらいつの間にか周りの仲間もみーんなバイトを始めてて、すっかり出遅れてしまった。もちろん、すぐに私もあとに続こうと思ったよ。このままだと遊び相手もいな

くて暇をもてあましそうだったし。
でも、親に釘を刺されちゃったんだ。
「どうして、この成績でバイトなんかできるんですか！」
怖かったよなあ、通知表を前にした母親。目が三角になって、今にも頭から角がにょきにょき生えてきそうだった。そりゃ、クラス順位が後ろから五番目じゃさすがにまずいか。
どうにか予備校の夏期講習を受講することは回避できたが、そのぶん自宅学習に毎日六時間以上というノルマを課せられてしまった。だけどなあ、そんなのどー考えたって無理だって。とりあえず、朝ご飯の後に机に向かってみたが、あっという間に眠くなる。それで仕方なく、気分転換とばかりに駅前まで繰り出したというわけだ。
今日も滅茶苦茶暑いんだけど、それでもここはアーケードの中だから、屋根がある分、まだマシ。しかも時折涼しい風がさーっと通り抜けるのが最高だよね。ここまでくれば、中学の頃の友達と偶然再会できたりするかもと期待したけど、残念ながらそれも空振りだったみたい。
「仕方ないなあ、昼ご飯買って帰るか……」
今日は平日。両親はいつも通りに仕事に出てて、大学生のお兄ちゃんもバイト。家に戻ってもひとり、携帯メールを打ちまくっても誰からも返信来ないし……
「あれ？」
とと、そんなことを考えていたら、タイミングよく着信音。どれどれ、心がけのいいのはどこの誰かな？
『やほーっ、千花！　元気ってる？　こっちは、もうサイコー！』
……こいつか。
がくっと脱力、思わず終了ボタンを押そうかと思っちゃったよ。
でもそうはさせまいと、相手はさらにまくし立ててくる。
『ねえねえ、このウォーターガーデン、超いいよ！　中でも浮き輪で滑るスライダーが最高、病みつきになっちゃいそう！　桜の彼氏の友達っていうのも、結構いいの。やっぱ、来てよかった～！』

……ちょっと、耳元で叫ばないでくれる？　頭蓋骨にまで響き渡るんだけど。

「そう。そりゃ、ようござんしたね」

うわっ、テンション低っ！　自分で自分の声にびっくりだ。しかし、敵は全然それに気づいていない様子。

『うんうん、マジよかった！　ありがとうね、千花。あんたが断ってくれたから、私に回ってきた話だし！　持つべきモノはやっぱ、あんたのような友達だね～！　……あ、みんなが呼んでる。じゃ、詳細はまた後日報告するね！』

叫び声の背後から聞こえる、キャーキャーという奇声。のんびりした商店街の風景とはあまりに違う世界に呆気にとられている間に、迷惑な電話は一方的に切れた。

「……プール」

思わず、口からこぼれ落ちた単語。

そうだよ。本当は今日、クラスメイトの桜とふたりで出かけるはずだったんだ。私が場所とかそこまでの交通手段とか、そういうの全部調べたんだから。そして、万事オッケーになったところで、とんでもない伏兵が現れた。

それは、桜の彼。

『いいねえ、俺も一緒に行きたいんだけど♪』

茶髪の髪をわざとらしくかき上げて、えへへと笑ってみせる。それで好感度アップを狙っているんだとしたら、まるっと逆効果だと思う。

しかし、桜は残念なことにこのケーハク男にマジで惚れてる。だから、そのお願いもふたつ返事で快諾してしまった。

『でも三人だと、千花ちゃんが仲間はずれみたいになっちゃうね。じゃ、こういうのどう？　俺のダチでフリーなの連れてくるから、そいつと遊んでやってよ』

ええええーっ、それは断る。コイツの友達だったら、絶対にチャラ男だもの。さらに綺麗に焼きすぎた肌をしていたりしたら、最悪だ。

『あ、駄目駄目。千花にはダンナいるから』
私が黙っているうちに、桜が勝手に返事をしてくれる。
『すごいんだよー、なにしろ十数年来の背の君だからね。この子の執念も半端じゃないんだ！』
ちょっとー、勝手に情報をばらまかないでよね。はっきり言って、すごい迷惑。
そりゃあ、話の内容は正しいよ。私は表向きはフリーでも、心の中には思い続けている大好きな相手がいる。いや、ひっそりとただ恋心を募らせているだけじゃない。ちゃあんと意思表示だってしてる。
でも、全然成果が上がらなくて、今日まで来ているんだな。
毎月毎月、「今月こそは！」って闘志を燃やすのに、玉砕しまくりなんだもん、嫌になる。
『……ふうん、じゃあ残念だけど仕方ないね』
かくして。
いつの間にか私は、メンバーから当然のように外れていたのだ。
「プール……」
今日も今日で、うだるような暑さ。こんな日に、遊び心いっぱいのアトラクションを満喫したら最高だ。あの茶髪男、いったい何を考えているんだ。普通はそこで、自分が諦めろっていうの。桜も桜だ、どうして友情より男を選ぶかな？　きいいいーっ、代わりにいくことになった美香子も含めて、みんながみんな、私に喧嘩を売ってるとしか思えない！
ふと見ると、目の前はスポーツショップ。今が売り時のウォータースポーツグッズが、店頭にずらりと並べられている。その気もなしに足を止めて、ついつい見入ってしまった。
すごーい、この水着。ちょっと身体を横にしたら、見えちゃいけないところがポロリとしそう。しかもこの、肉まんもびっくりなパットは何？　へえええーっ、今ってこんな風になってるんだな。
最初は冷やかし半分のつもりだった。でも気づけば必死になって

いる自分がいた。
そうだ、去年は灰色受験生で夏休みのほとんどはがっつりと塾に通ってた。もちろん、周りの友達もみんなそうだったから、遊びに行くとかそういう予定が全然組めなかったんだな。
今まで持っていたのは、体型を隠すワンピース型ばかり。でも、ちょっとはダイエットに成功した今年なら、もしかしてこういうのにも挑戦できるんじゃないだろうか。
「うーん、これはさすがに詐欺かなあ……」
思い切りパットが仕込まれたビキニを手に、ちょっと躊躇いが生まれる。だけど、半額どころか７０％オフとかついてるし、これは絶対に買い時だよね？　出るところが出ていれば、くびれ不足の欠点だって隠せると思うし。
「ああ、こっちも可愛いなあ。ピンクっていうのが、乙女だよね」
思いっきり独りごとをいいつつ、さらに物色。片腕には次々と派手派手な水着が掛けられていく。
それにしてもすごい。
これって、ほとんど下着と変わらないよ。それなのに「水着だから」を理由に、こんなに堂々と売り出しちゃって。
いやいや、ここで迷ってどうする。
義務教育が終わった私は、もう立派な大人。だから、セクシーな水着にだって、デビューしちゃうんだ。そうだよね、これ、水着だもん。何気ないふりをして、思い切り挑発することだってできる。
「黒とピンクだったら、断然ピンクだよなあ。でも、こっちの白も捨てがたい。むーっ、どれもこれも素敵で選べないよ～」
……って、まだ試着する品物を選んでいるだけなのに。私はもう、プールに飛び込む寸前みたいな気分になってる。
そうだよ、自分の好みで選んじゃ駄目。ここは、相手のことをしっかりと見極めて切り込まないと。
丸十二年以上の片思いキャリアは伊達じゃない、勲くんの情報なら余すことなく脳内メモに書き込まれている。

「こうなったら、一番ぼいんぼいんに見えるのにしなくちゃだな～」
多少の偽装工作なら許されるはずだ。だって、こんなに堂々と肉まん水着が売ってるんだもの。世のほとんどの女性がこれを選んでるってことだよね。だったら、私だけが悪いわけじゃない。
そのとき――
「おい」
不意に手元が薄暗くなる。聞き覚えのある声にもしやと思って顔を上げると、そこにはやはり「彼」がいた。
黒須勲、十九歳。今年の春から、大学生。現役合格だから、私の三つ年上だったりする。
「さっきから、馬鹿面をさらしてなにやってんだ」
ひょろりと電信柱みたいな長身の上に、結構なイケメン面が乗っている。相変わらず、直球ど真ん中ストライクに好みの顔だ。
でもなあ、どうしてこんな場面で現れるんだよ。しかもそのシャツ、全然似合ってないし。
「見りゃ、わかるでしょ？　買い物だよ、買い物。勲くんこそ、今日はバイトじゃないの？」
お隣に住む幼なじみでもある彼は、駅前のスポーツジムでバイトをしている。夏休みはキャンペーンを展開することもあり、さらにシフトがぎっちりになっているという噂。
「家にいてもやることないしな、少し早めに出てきた」
相変わらず、すっごく可愛くない言い方。もうちょっと、愛想というモノがあった方がいいと思うんだけど、それでも格好いいんだから仕方ない。
「買い物って、それが？　やめとけ、お前がそんなの着て歩き回ったら、はっきり言って公害だ」
きーっ、またそんなこと言ってるし！　どーして勲くんはいつもこんなに意地悪なの？
「こっ、公害なわけ、ないでしょ！　見たこともないくせに、勝手に決めつけないで！」

そこで止めておけばよかったんだ。だけど、走り出したら止まらないのが私の性格。ついつい余計なひとことが追加される。

「じゃ、本当に公害かどうか、自分の目で確かめてみれば？　ええっ、今日はこれから、私のファッションショーに付き合ってもらうからね！」

その5＊勲

突き抜けるような青空、今日も夏が続いている。

ようやく前期試験から解放され、小中高校生よりも少し遅れて夏期休業に入っていた。

だが、だからといって、普段となにが変わるわけでもない。大学の講義はないが、その分バイトのシフトをぎっしり入れた。家にいてもやることはないし、ゴロゴロしていて無駄な時間を過ごすくらいなら少しでも多く稼ぎたいと思う。

そう、今まではあまり物欲もない俺だったが、この夏ばかりは話が別だ。

「……あれ？」

駅前に続く商店街のアーケードに足を踏み入れて、ふと立ち止まる。

何軒か奥のスポーツ用品店、そこは俺にとっても馴染みの場所であったが、今その店頭で見覚えのある頭が見え隠れしている。あれはたぶんそうだ、間違いない。

数日前、あの髪型を初めて見たときには腰を抜かしそうになった。丸い頭の上に、馬鹿でかい鳥の巣のようなモノが乗っている。一度束ねた髪を大きく膨らませて留めているらしい。

本人はお洒落でやっているつもりのようだが、あれはどこからどう見ても鳥の巣だ。朝起きたら、どこかの鳥があの中で卵を温めていたらどうするつもりだろう。

――もしや、あれで身長を少しでも高く見せようと思っているのか。

そんな考えが頭を過ぎったが、可哀想なので本人に確認するのは止めた。

どうも、水着を選んでいるらしい。

今は夏のバーゲン真っ盛り。どの店でも、早いところ売り切って

しまおうと言わんばかりに夏物を店頭にたくさん並べている。彼女が選んでいる水着もそんな商品のひとつだった。

街一番の品揃えを誇る店だけに、その種類も多種多様。目移りしてしまうのも仕方ないことだ。だが、あれはひどい、両手にいった い何着引っかけているのだろう。しかも懲りもせず、さらにハンガーをかき分けている。

まったく仕方のない奴だ。あれもこれもと目移りしてひとつに決められないのはガキの頃から少しも変わっていない。よし、ここは年長者らしく釘を刺してやるとするか。

「おい」

近くに寄ってから声をかけたのに、こちらの気配にまったく気づいてなかったようだ。慌ててこちらを見上げた顔は、半端なく驚いている。

「さっきから、馬鹿面をさらしてなにやってんだ」

さらに畳みかけるようにそう言うと、たちどころにぷううっと頬を膨らませる。これほどに喜怒哀楽がわかりやすい人間も珍しい。

彼女の話によると、やはり見たとおりに水着を選んでいたらしい。あまりに種類が多すぎてひとつに絞りきれず、とにかくはいくつか試着してみて決めようと思ったようだ。

それにしてもなんだ？　その人を邪険にした目は。仮にも俺は、お前の片思いの相手だろうが。しかも付け加えれば、初恋の相手でもある。熱愛する想い人が有り難くも目の前に現れたのだ。もう少し嬉しそうな顔をしたらどうなんだ、まったくもって訳がわからない。

こっちもそれなりに稼ぎのある身だ、こうして偶然出会ったのだから飯ぐらい奢ってやってもいいと思う。だが、こちらから誘うのも癪だ。うまい具合にそういう流れにならないものか。

まったく、いつまで買い物を続けているつもりだ。俺が来たんだから、さっさと切り上げろ。

ちょっと腹が立ったから、からかってやった。そうしたら、予想

以上に食いついてくる。
「……ええっ、今日はこれから、私のファッションショーに付き合ってもらうからね！」
どうして、こんな展開になるんだ。
「馬鹿言うな、俺は帰るぞ」
くるりと背中を向けたら、がしっとシャツの裾を引っ張られる。
「ちょっとー！　乗りかかった船でしょっ、途中で降りないで欲しいんだけど！」
……って言うか、こっちはまだ話に乗ったつもりもないのだが。
「ふーん、勲くんの薄情者っ！　そんな風にしていると、モテないよーっ」
ここは、目を三角にして怒るところか？　だいたい、今シャツを破れんばかりに引っ張っている約一名は俺にぞっこんなんだから、それで十分な気がする。あちこちにモテまくったら、その方がコイツにとってはヤバイんじゃないか？
「客観的な意見が知りたいだけだって。ちょっとだけ付き合って、五分で終わるから」
……おいおい、お前の「五分」は「一時間」なんだぞ？　こっちは長いつきあいなんだから、よく分かっている。
「……本当に、すぐ終わるんだろうな」
まあ、いいか。どうせ暇なんだし。あまりに邪険にして、必要以上にヘソを曲げられるのも面倒だ。コイツはあっさりしているように見えて、なかなか執念深い。下手にいじって根に持たれると大変なのだ。
「うんっ、ありがと！」
そして、あっという間に満面の笑みを浮かべている。本当にわかりやすい奴だ。
「えっとー、じゃあ最初はどれにしようかな。やっぱ、いきなり超大胆なのはきついかな」
どうでもいいから、早く終わりにして欲しい。そう思うのだが、

あえて口には出さなかった。ああ、なんて大人な俺。
「じゃ、ちょっと待っててね。すぐに着替えるから！」
そう言って、いそいそと試着室へ。まあ、なんとなく俺も彼女のあとに続いた。
「それにしても、ずいぶんと熱が入ってるな。海にでも行く予定があるのか」
まあ十中八九、女同士だろうけどな。
「うん、これから予定作る！　だから、まずは格好を決めて気合い入れるんだ！」
やはり、順番が間違っている。かたちから入るのは大切かも知れないが、それで誰も話に乗ってくれなかったらどうするつもりだ。
「じゃーんっ、どう？　でもなんか、フツーって感じだよねえ」
そして着替えも瞬間芸。下着とかが無惨にも足下に転がっているが、そこには目をつぶろう。
最初のお披露目は、セパレートタイプだが露出度はかなり控えめな一枚。Tシャツを途中で切ったようなトップに下はホットパンツ形。このまま街を歩いても、ギリギリオッケーではないかという感じだ。
「ふーん、それでいいんじゃね？」
気のない感じでコメントすると、あからさまに嫌な顔をする。
「勲くん、その台詞はレディに対して失礼だよ」
そして、上目遣いに俺を睨んで言う。
「わかった、これじゃ全然駄目ってことだね？　じゃあ、次っ！　ちょっと待ってて」
そして、元の通りにカーテンを閉めて一分半が経過。
「ねえねえっ、今度はどう？　ちょっとはムラムラするっ！？」
そんな風に言いつつ、頭の後ろに片手を添えてポーズを取ってみる。わざとらしく身体をねじっているのは、くびれを見せようという涙ぐましい努力だろうか。
「う、うーん……そうだなあ」

心なしか、さっきよりも胸がでかくなった気がする。かなり上げ底をしているように思うが、そこはコメントしては駄目だろう。
「ま、まあまあじゃないか？」
正直、こっちは日常的に女の水着姿を見ている。バイト先がそういう場所なんだから、当然だ。まあ、中には残念な感じのご婦人もいるが、それをいちいち気にしていても仕方ない。
ピンクのビキニは、全体的にフリルがあしらわれている。まあ、可愛いと言えば可愛いという感じだ。
「そう？　勲くんはこっちのが好み？」
こうして見れば、それほどスタイルが悪いようにも見えないな。本人は太めを気にしているようだが、とりあえず出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる。
まあ、なんというか……正直なところ、ここまで成長していたとは思わなかった。
「これにしちゃおうかなあ～っ、だけどもう一枚試してみたい気もする。ねっ、どうかな。なかなか悩殺でしょう？　思い切ってこういうのもいいかと思うんだけど～」
「……はぁっ？」
目の前に突き出されたブツを見て、俺は一瞬固まってしまった。見た感じは普通のビキニ、色はブラック。だがしかし、だいぶ布地が少なくなっている気がする。しかも……それはいわゆるＴバックって奴じゃないか？　まるで相撲取りのまわしのようだぞ！
「おっ、おい！　それはさすがにまずい、止めろ！」
「え～っ、いいじゃん。試着するのはタダなんだし～もしかしたら、結構似合うかも知れないよっ！」
「似合うとか似合わないとか、そういう問題じゃないぞ！　悪いことは言わないから、止めとけ！」
このまま行くと、本気で試着してしまいそうだ。だから、強引にその手から問題のブツを奪い取った。
「ほらっ、今着ているので決めていいから！　とっとと、元の服に

着替えろ！」

「ぎゃーっ、ひどい！　勲くんの人でなし！　サイテ～っ！」

客もまばらな店内に、ふたりの声が響き渡った。これには顔なじみの店長もびっくりしたようだ、慌てて飛んでくる。

「おいおい、止めなさいふたりとも！　他のお客さんがびっくりするだろう。……おやおや、千花ちゃん。とてもよくお似合いだよ。それ、今年特に人気だったシリーズだから、絶対にお勧め」

「えっ、そうなんですか。や～ん、私って見る目ある～！」

嘘っぽい褒め言葉を真に受けて、彼女はすぐに上機嫌になる。

「わかった、これに決める！　ふっふ～ん、これでビーチサイドの視線は私に集中だね！」

いやいや、いくらなんでもそこまでは行かないだろう。しかしまあ、よくよく見ればこれだって結構な露出じゃないか？　少し身をかがめただけで、胸の谷間がはっきりと見えるぞ。こんな姿を誰彼構わず見せるのか？　それはちょっと遠慮して欲しい。

……ととと、これはマズイ、かなり危険だ。

「おい、千花」

「な～に～？」

カーテン越しだけど、なんとなく背を向けていた。これが紳士のたしなみというものだろうか。

「お前、まだ予定が決まってないと言ったな？」

「うんっ、でもせっかく水着も決まったし！　だから、すぐにメールして～……」

俺は大きく息を吸って、それから吐いた。

「行きたいのは向日町のウォーターガーデンだろ？　あそこ、電車の乗り継ぎが結構面倒だぞ」

「それくらいは平気～根性で乗り切れるもん！」

女子の友達と行くとは言うが、安心はできない。はっきり言って、あの場所はナンパの宝庫だ。

「なんなら、俺が連れて行ってやってもいいぞ」

「へ！？」
いきなりカーテンが全開するから驚いたが、着替えも終了していたらしい。まったく、いちいち心臓に悪いばかりだ。
「ほら」
馬鹿っ面な鼻先に手にしていたモノを差し出すと、彼女は目を丸くする。
「……勲くん、写真写りが最悪っ！」
――なんで、最初にそこかい！
「っていうか、いつの間に教習所通ってたの？　ウチのお兄ちゃんなんて、まだ全然だよ～」
「ふん、これくらいのこと、常識だ」
これでいて、俺はなかなかに努力家だったりする。大学の講義とバイトで忙しい日々の合間にせっせと通い、最短コースで免許を手に入れた。
「溺れたときには助けてやれるぞ、お前は浮き輪なしだとすぐに沈むからな」
ついでに軟派な奴からも守ってやる、とはさすがに言えなかった。
「今回のところは親父の車だ。まあ、それくらいは我慢しろ」
「……あっ、ちょっと待って！　これ、お金払ってくるから！」
すたすたと先に歩き出したら、慌ててそう言う。まあ、店の外に出て待っててやるつもりはある。その先のことは、あとから考えればいいだろう。

その6＊千花

気合いを入れたい日に限って雨が降る。

これは、子供の頃から変わらない私のジンクス。……っていうか、ようするに「究極の雨女」でビンゴだな。

とにもかくにも、人生節目の日には必ず雨が降る。生まれたその日も大嵐だったって聞くし、お宮参りに七五三、幼稚園の入園式に卒園式だって傘なしではとても外を歩けない空模様だった。もちろん、運動会や遠足は順延や予定変更がデフォルト。

そんな感じだからね、たまにてるてる坊主が威力を発して雲間から青空が覗いたりすると、半端なく驚いてしまう。こりゃ、今年全部の運を使い果たしたんじゃないかとか、逆に不安になったりしてね。

――まあ……そういうことだから、この状況も想定内ではあったんだよ。

「うっわーっ！　どーして、ここまで直撃かな……」

台風の進路予想を示すＴＶ画面を睨み付けながら、大きく溜め息。だから、だろうな。朝ご飯がとっくに終わった時間なのに、窓の外は薄暗い。しかも、ガラスに当たる雨音が半端なくすごい。風に煽られて束になって、どばっどばっと容赦なく吹き込んでくる。

まったく、どうして今日に限って。

昨日はここまでひどくなかったし、明日の夜明け前には完全に通り過ぎている。しかも残暑が戻ってくるとか抜かしているよっ、この気象予報士さんは私になんか恨みでもあるのだろうか。

「でもーっ、もしかしたら、ここで突然進路変更とかあり得たりするかもだしーっ」

そうよ、そう。自然現象はいつでも気まぐれ。いきなり予想外の展開になることだって、十分にあり得る。だから、もうちょっと粘ってみてもいいかも。

今日は夏休み最終日、平日だから両親は当然ながら仕事。そして、大学が夏休み中の兄は昨日からサークルの合宿に出かけている（もちろん、「お前のせいで予定が台無しだ」という恨み節なメールが届いてた）。

そんなわけで、ひとり寂しく自宅に取り残された私。今はリビングのソファーに膝を抱えて座ってる。テーブルの上には、水着の入ったバッグとランチボックス。出かける準備は二時間前にはばっちり終わっていた。

そして、もうじき待ち合わせの時間。時計の針がひと目盛りずつ進むたびに、ギリギリと歯ぎしりをしてしまう。

――ピンポーン♪

うわっ、時間どおり！　玄関チャイムの音を聞いて、慌てて立ち上がる。

えっとー、どうしよう。ここは荷物を持って移動するべきか。だけどそれじゃ、すごい楽しみに待っていたみたいで格好悪いかも。うーん、どうしたもんか。

――ピンポーン♪　ピンポーン、ピンポーン、ピンポーン♪

「わっ、わかりましたって！　ちょっと、待ってよ！」

ちょっとさー、ここまでくるとせっかちが過ぎない？　あまりに連打しすぎて、ボタンが壊れたらどうするつもりなんだろう。

「はい、はーい！　今、開けますよ～……」

れれれ。

ドアのレバーを持ったまま、私はそこで固まってしまう。

だって、目の前にいるのは頭から足の先までずぶ濡れの男。なんなのこれ、どーなってるの？　うーん、不思議だ～。

「おいっ、タオル！　とにかくなにか拭くものをよこせ！」

そして、濡れ鼠な男は、いきなり命令調。はいはい、わかりましたって。そんな怒鳴らなくたっていいじゃない。

「はいっ、どうぞ。というか、そこにいるとますます濡れない？　とにかくは、中に入ってよ」

慌てて差し出したのは、クマさん柄のタオル。彼は一瞬だけ嫌そうな顔をしてから受け取った。

「……当然だ」

靴音も、「びちゃ、びちゃ」って感じ。玄関のドアを閉じたら、ようやく雨風の音が遠ざかって静かになった。

「えとー、……どうしてそんなに濡れちゃってるの？」

だってさ、変だと思わない？

彼の家は我が家のお隣。ドアからドアまで、一分足らずで到着しちゃう。さらに垣根を跳び越える裏技もあるけど、近頃ではさすがにそれは使わなくなったかな。

当然の質問をした私を、頭をゴシゴシしていた男がじろりと睨み付ける。

「もしかして、傘を差さずに来ちゃったとか？　いやーっ、それはマズイっしょ。駄目だよ、面倒くさがっちゃ」

そしたら、またじろり。そして、彼はようやく口を開く。

「そんなもの、家の玄関を開けた途端にどこかに吹っ飛んだ」

「えーっ、うっそ～！」

さすがにそれはないだろうと思いかけたものの、外は前人未踏の豪雨だ。いや、それはさすがに大袈裟か。でも、少なくとも私の人生では、未だかつてないものすごさだと思う。

「まあいい、ちょっと上がらせろ。服はそれほど濡れてないから、扇風機にでも当たって乾かせばいいだろう」

彼はそう言うと、勝手知ったる他人の家とばかりに、靴を脱いでまっすぐにリビングに向かっていく。そして中に入る直前に、玄関先で呆然と突っ立ったままの私を振り向いた。

「客が来たんだ、飲み物くらいいれろ」

勲くんのバイトは水曜日休み。今年の夏はギリギリめいっぱいのシフトを入れたとかで、それ以外の休みは全くなし。それでも夏休みなんだし一度くらいは予定が合うだろうと気楽に考えていたんだ

けど、それがどうにも。私の赤点補習が入ったり、勲くんのサークルの旅行があったり。そんなことをしているうちに気がついたら、最後の最後、たった一日しか残っていなかったってわけ。

……なにが、って？

そりゃ、決まってるでしょーっ。プールだよ、プール！　勲くんが言い出したんだからね、私が桜と行くはずだったウォーターガーデンに連れて行ってくれるって。しかも車まで出してくれるって……これって、そのまんま「デート」って位置づけでいいんでしょうか、皆様っ。

でもーっ、あり得ないことが起こったってのは認めるけど。だからといって、この天気はひどすぎだと思う。どんな不幸な星の下に生まれてきたんだよっ、自分。

アイスカフェオレをふたりぶん作って運んでいくと、勲くんは扇風機の前を陣取って朝の情報番組を見ていた。グルメレポーターのお姉さんが、大きな海老の乗ったお寿司をぱくついている顔が大写しになってる。

「……やっぱ、お前は行く気でいたんだな」

テーブルの上の荷物を見てのコメント、当然のことながらかなり呆れた響きだ。

「だっ、だってー。起きた頃はもうちょっとマシだったし、もしかしたらこのまま雨が上がるかなと思ってーっ……」

いやいや、それはないだろう。天気予報を逆さまから見ても、とても奇跡は起こらなそうな感じだった。

「あのなあ、大雨洪水警報に加えて落雷の危険性もあるといわれてるんだぞ。そんな中で泳ぎに行こうなんて、どんな馬鹿だよ」

「ま、まあ、その考えには一理あるかも……」

「それに、電話で中止を伝えたりしたら、お前のことだ、怒り狂ってウチまで直接やって来ただろう？」

勲くんはそこで、もう一度こちらを振り返る。

「そんなことしたら、今頃は傘ごと空に吹き飛んでたぞ」
「で、でも……」
彼の言い分はわかる。誰が聞いても正当な意見だと思われるだろう。でも私、まだ諦めきれない。
そんな感じで、ふたりともしばらく黙ってアイスカフェオレを飲んでいた。どんな言葉を並べたところでどうにもならないことはわかっている。でもでも、やっぱ言わずにはいられないんだ。
「プール、今日までなんだもん。そしたら、また来年まで待たなくちゃならないでしょう……？」
温水プールとかで、一年中営業している施設だったらいいよ。でもあそこのウォータガーデンは夏季限定、８月３１日できっちり店じまいをしてしまう。
まさか、こんな大切な日に台風が来るなんて。マジでショックが大きすぎる。
「まーっ、こんな風に駄々をこねられるとは思っていた」
そう言って、勲くんはやおら立ち上がった。そして、テーブルの上のランチボックスを手にすると、そのまますたすたと歩き出す。
「行くぞ」
私がいつまでもぼんやりと突っ立ったままでいることに気づいたのだろう、廊下に出るところで後ろ向きのままで言う。
「……えっ、嘘っ！？」
まさかまさか、そりゃないだろう。ちょっと待って、いくら私でも今日は無理なことくらいわかる。わかっているんだけど、それでも愚痴りたくなっただけ。うん、ただそれだけなんだから……！
「行き先は変更だ、今日は一日、俺の自主練に付き合ってもらう」
そう言って彼がポケットから取り出したのは、バイト先の鍵。
「えええっ、定休日に勝手に入っていいの？　あとで怒られたりしない……！？」
「支店長には了解取ってある。最後の戸締まりさえしっかりすれば平気だし、他にも同じように施設を使っている人は何人もいるから

な」

それって、すごいアバウトな職場かも。もしかして、勲くんはそんなオイシイ部分があることも見込んで選んだのだろうか。

「だいたい、お前は簡単にプールプール言うけどな。あそこのウォータガーデンは浮き輪禁止の場所が多いんだぞ。カナヅチのお前じゃ、苦労するのは目に見えている。だから、来年のためにもまずは25メートル泳げるようになれ」

うわーっ、なんか失礼なことを言われてるし！　でもまあ、言われることはもっともだしなあ……。

「飯代が浮くぶん、帰りにはなにか奢ってやる。それでいいだろう？」

「えっ、えーっ！　じゃあ、わたしっ、駅前パーラーのビックパフェがいい……！」

なんかよくわからないけど、とにかくふたりで出かけることはできるらしい。予定は大幅に変更だけど、それもまた楽しいかな。

「太るぞ」

勲くんは、靴を履きながらぼそっと言う。

「でもまあ、明日への活力をつけさせてやるのも必要か」

彼は自分を納得させるようにそう呟いたあと、玄関のドアレバーに手をかけた。

（110831）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0131u/

ついたち☆ガ～ル

2011年9月1日03時24分発行